

2019年12月28日

小諸市協働連携事業調査研究活動による提言書

中山間農村の村おこし活動—小諸市氷区の事例を中心に—

明治学院大学国際学部重富ゼミ、2019 年度 3 年生（17KS 生）

文責：重富真一（明治学院大学国際学部教授）

目次

- I. はじめに
- II. 調査の概要
- III. 氷区の社会と地域づくり—学生の間取り調査から—
 - 1. 村の成り立ちと地域おこし
 - 2. 村の農業と経済
 - 3. 農村女性の活動
- IV. 指導教員の解題
- V. こんなことしてみたら？—学生の提言—

I. はじめに

小諸市は千曲川を挟んで南西側と北東側の斜面に農地の大部分が広がっている。今回、明治学院大学国際学部重富ゼミ 3 年生 13 人は、11 月 9 日—10 日の間、南側斜面の川辺地区氷区（氷集落）におじゃまして地域社会や農業に関して学習する機会を得た。氷区には「氷風穴」と呼ばれる地域資源があり、住民有志がこの風穴を使った地域おこし活動に取り組んでいる。今回の訪問調査のポイントは、こうした地域おこし活動がどのような地域社会の歴史や基盤の上になりたっているのかを理解することにあつた。

ゼミ生は 2 年の秋学期に日本の戦後農業・食料事情の変化と日本の農村社会構造に関する文献学習をおこなった。3 年の春学期には途上国の開発問題、農業問題を学び、夏休みにはタイにおいて農村部での調査をおこなった。また今回の訪問に先立って、学生は中山間地農村地域社会が抱える課題について文献学習し、小諸市のホームページにある統計情報から小諸市や川辺地区、氷区の経済社会指標の特色を把握した上で調査に臨んだ。指導教員の重富は 9 月に氷区を事前訪問し、地域の概況把握と学生調査の打ち合わせをおこなった。

なお重富ゼミは 2016 年から毎年小諸市で調査を行ってきた。これまでは北斜面地域（大里など）が主な調査地であったが、今回ははじめて南斜面を中心に調査をおこなった。南斜面は北向きの斜面であるため、日照の点で不利な条件がある。その一方、良質な土壌条件があり、御牧ヶ原台地ではかなり広い農地が確保できる。

以下では、調査対象者と調査日程を簡単に説明し、つづいて学生による聞き取り内容をま

とめたうえで、とくに氷風穴に焦点を絞って、小諸市への提言としたい。また参加学生には、小諸市を盛り上げるためのアイデアを出すように指示しておいた。荒唐無稽なものもあるかもしれないが、20 歳ぐらいの若者達の思いつきを最後に掲げておいた。

Ⅱ．調査の概要

1 日目（11 月 9 日）は昼食後、釈尊寺を見学した後、氷区に赴き、区長さん以下、地元の皆さんの案内で集落と風穴を見学した。氷区ではかつて養蚕が盛んで、製糸工場があり、多くの女工さんが暮らす寄宿舍、女工さん達が入った銭湯まであったというお話を聞いた。

その後、氷区の集会所にてはじめに小諸市職員の方から地域の概要と市行政の取り組みについて説明があった。続いて、学生は 3 つのグループに分かれて、氷区の皆さんと懇談をした。3 つのグループのテーマは、①村の成り立ちと村興し、②地域の農業と経済、③農村女性の活動、である。それぞれのグループに地域の方に 3 人ほど入っていただいた。学生はあらかじめ各自質問を用意していたが、地域の方の返答に応じて、話題を変えつつ、自分たちが知りたいことを会話の中でつかむよう、重富より指示を受けていた。

調査 2 日目は、川辺地区の農業と農業委員会の役割について、農業委員の A 氏、B 氏および新規就農者の C 氏からお話を聞いた。また御牧原土地改良区理事長、D 氏から御牧ヶ原の開墾と灌漑整備についてお話を聞いた。昼食を挟んで、川辺地区豊かな地域づくり委員会会長、E 氏から川辺地区の地域づくり活動についてご講義いただいた。その後は、懷古園を見学したのち帰路についた。

本提言書は、学生がまとめた氷区での懇談記録を重富が編集したものである。学生の驚きや気づきをできるだけ残したいと考え、重富の編集は必要最小限にとどめているが、本稿の内容、記述に関するすべての責任は重富にある。

なお、学生はこれらの調査以外にも、農家民宿青雲館に宿泊し、「家庭の味」を楽しんだ。また今年も民宿天池荘のご主人にはご厚意でリング狩りをさせていただいた。これらすべてが学生にとって忘れられない思い出となった。

今回の調査にご協力いただいた小諸市氷区、川辺地区のみなさまと、調査のアレンジと当日の同行・時程管理をしてくださった小諸市企画課市民協働推進係職員および川辺地区担当職員の皆様に深く感謝の意を表したい。

Ⅲ．氷区の社会と地域づくり—学生の聞き取り調査から—

以下は各グループの懇談で聞き取ったことを学生が要約したものである。

1. 村の成り立ちと地域おこし

(1) はじめに

お話を伺ったのは、氷区の区長を務める F さん、氷区の歴史にお詳しい G さん、H さんの 3 名である。氷集落とは、長野県小諸市小諸町大字大久保を構成する 1 つの集落である、大

字大久保は計5つの集落で形成されるが、氷区は最も戸数が少ない。住民は氷区を自分たちのムラと意識し、様々な共同活動を行っている。今回の調査では、小規模な集落でどのような活動が行われ、氷区が維持されているのかを明らかにする。

(2) 氷区の活動

風穴の観光資源化

養蚕について学ぶため、ある大学のゼミ合宿が氷区で開催された。合宿中にかつて蚕の保存施設として利用されていた風穴も見学する機会があった。その時に風穴を見た学生が驚いたことで、日常の一部になっていた風穴の魅力に地元の人たちが気づいた。また、このゼミ合宿と同時期に、建築士会の大会がおこなわれた。大会テーマは、「地域実践活動報告」であり、長野県建築士会佐久支部の人たちが氷区の風穴利用に注目した。彼らは『風穴のある場所の価値』という形で大会にエントリーを行い、全国大会最優秀賞に選出された。そのことで、より一層風穴を観光資源として利用した方がいいのではないかという意見が強まり、区長を始めとした方々が尽力し現在のようになった。

祭り

祭りは、自分がその村に住んでいるというアイデンティティを認識するために重要な行事であるという。地区ごとの祭りはあるが、小諸市全体での祭りはない。さらに、よその村に行ってまで、祭りに参加することもないという。祭りは区民にとって、とても親密な存在である。

氷区としての祭りは大きく分けて年に6つある。祭りは、区全体で行っていて、役割は12人から13人で当番制で回している。役員を決めたり、時間が空いている人が当番になったりしている。祭りの中身、内容は昔と変わらないが、当番のシステムは昔と比べて変化した。昔はかしきと祭り当番という役割に分かれていた。かしきは、祭りで必要な料理を作ったり、準備をしたり、片付けをしたりする。2人1組で、この役割を祭りごとに担当を変えて行ってきた。このかしきは今も引き継がれている。

一方で、祭り当番の役割は大きく変わった。今も昔も祭りの際に、神主さんを遠くからお招きしている。昔は、交通の便が悪かったため、神主さんは祭りが終わってから、また遠くの家まで帰ることが困難であった。その際に、神主さんは、祭り当番の家に泊まり、翌朝また自分の家に帰ることが一般的であった。つまり、祭り当番は、祭りに呼んだ神主さんのお世話をする係であり、宿を提供する役割であった。今は、交通の便が整っているため、この役割は必要ではなくなった。現在、祭り当番は祭りのための寄付の集金を担っている。なお、お祭りは、区民の寄付で行われている。

祭以外の村全体の共同活動

村全体で行われる行事として、2つの行事がある。1つ目は草刈りで、1メートルごとに

10 円が市から支給されることになっている。2つ目は、親老会が行う公共施設の清掃作業である。清掃作業は年に5回行われている。

もうひとつ村人全員で支えてきた組織として消防団がある。現在の消防団員は9名であるが、村人全員が消防団を経験しているという。消防団の主な働きは、火事の際の消火活動、水害の際の復興活動、行方不明者の捜索である。

(2) 区の共同経済

共有地

村落は財産を有し、共同で管理している¹。その財産とは「共有地」と呼ばれる。氷区の共有地は3種類に分けられる。「氷区で管理しているもの」、「複数の区で管理しているもの」、「川辺地区で管理しているもの」である。以前は、共有地の木材を販売し収入を得ていたが、外国産の安い木材活動が流入したことで売れなくなった。これによって、一時は共有地の管理が大きな負担となったが、現在はソーラーパネルを設置し収入を得ているという。

共有地を管理するための資金は各区で各戸から徴収しているそうだ。複数の区で徴収する場合、戸数は異なるが、収入も戸ごとに振り分けるため金額の大小は平等だという。

5号風穴のある場所は氷区と大久保の共有地であるが、観光地化に向けた協議の末、氷区が管理するに至った。

村の収入

氷区の収入源で一番大きな割合を占めているのは、住民からの集金である。次に多いのは草刈り作業や公共施設の清掃などに支払われる市からの交付金である。

住民からの集金のことを村では「区費」と呼んでいる。住民は区費として年間6,000円を区に支払っている。また、それとは別に「積立金」という形で住民は月額1000円を支払う。積立金は農道の整備や神社に改修工事の費用にあてられる。このため氷区の住民は年間にして合計18,000円を区に払っている。

ただ、中山団地に住む方々には積立金の義務がない。これは、中山団地に住んでいる人が比較的最近になって移住してきた人が多いことが理由である。さらに新しく移住してきた人々には共有地の権利が無いため支払いの義務も無い。

(3) 他区との繋がり

小諸市が設営している公民館の館長を区で回すほか、3つの区から一人役員を出さなければならない。これ以外には他の区や小諸市全体での行事に関わる機会はない。小諸市という単位でお祭りが無いことからわかるように、市民全体で取り組む行事はないという印象だった。ただ、集会場に飾ってあったベースボール大会の写真には、「氷区」という

¹ 鳥越皓之『家と村の社会学』世界思想社、1985年。

チーム名が書かれていたから、区対抗の行事があるのではなかろうか。

(4) おわりに

氷区のムラとしての活動を、祭り、共同活動、風穴観光資源化の過程などから見てきた。また村の運営基盤となる経済資源についても、村の共有地と村の収入について聞き取った。区を超えた活動がいまだにあまり多くないことからしても、区は現在もひとつのまとまった社会空間をなしている。その社会空間にすむ人たちは、祭りを通してアイデンティティを確認し、祭りその他の共同活動を通して日ごろから組織活動を行ってきた。こうしたまとまり意識と共同活動の経験が、風穴を使った地域おこしにつながっている。

風穴が観光資源として意識されたのは、氷区で行われた大学生のゼミ合宿がきっかけであった。ゼミ学生により、風穴の魅力に気づき、さらに建築士会の大会の中で風穴が評価されたことで観光地として利用されるようになった。このように外部からの新しい視点を「気づき」に変えている。

2. 村の農業と経済

(1) はじめに

私たちは川辺地区において農業を行っている I さんと新規就農者である J さん K さんご夫妻にインタビューを行った。川辺地区は、日照時間が短いものの、土質が良い。2 世帯の農家の方々は、そうした地域の特色を生かして、菊、トルコキキョウなどの切り花栽培をおこなっている。現在では川辺地区の 9 人で花卉組合を結成している。

切り花の販売では生産者が値段を決められないという問題がある。若者の新規就農が少ないといった問題も生じている。これらの問題を改善するために、新規就農者である田中さんはドライフラワーやエディブルフラワーなどの新しい試みを行っている。このように、川辺地区の農家は川辺地区における問題意識を理解しつつそれに対する解決策を現在模索している途中である。

(2) 小諸市農業の概況

小諸市の年間降水量は、794.55mm で、全国でトップの晴天率を誇っている²。昼夜の寒暖差が大きく、農業に適した気象となっている。耕作面積は 1534.62ha で、多様な農作物が生産されている。浅間山の南斜面は、日照時間が長く、稲作・高原野菜・果樹の栽培が盛んである。特に、りんごの生産が盛んに行われおり、「信濃ゴールド」「信濃スウィート」「秋映」が有名である。

今回、インタビューを行った氷地区は、千曲川の南側に位置するため斜面が北側に向いて

² デジタル農活信州(小諸市) (<http://www.noukatsu-nagano.net/modules/info/detail/208>)、2019 年 11 月 30 日参考。

おり、浅間山南斜面の地域に比べて日照時間は短い。そのためりんごの生産はあまり行われていないが、土壌が強粘土質であるため、伝統野菜の「白土馬鈴薯」やトマトの生産が盛んである。「白土馬鈴薯」は、通常のジャガイモに比べ、色が白くホクホクとした食感が特徴である。

(3) 切り花栽培

栽培の概況

小諸市は、切り花発祥の地とされている。主に、菊やトルコキキョウを生産している。氷地区は寒暖差が大きいため、切り花が大変色鮮やかである。切り花の市場は、主に東京や神奈川である。野菜や稲に比べ、切り花の単価は高い。食物とは異なり、切り花は自由競争で生産されているため、国からの補助金が出ていない。高齢化の影響により、切り花の生産者が減少しており、生産者の多くは 70 歳代である。個人経営農家は、後継者問題を抱えていて、耕作放棄地も増加している。

切り花は、手作業で生産を行うため、生産性の向上が難しい。生産者の生活を向上させるためには、第 6 次産業に着目していく必要があるようだが、切り花の加工品の需要が十分にあるわけではなく、生産者は難しさを抱えている。

市場環境

今日、切り花の需要は減少気味だという。市場では、多肉植物やドライフラワーが人気となっている。切り花の市場価格は、100 本あたり 6,000 円程であるが、切り花の市場価格は時期によって大きく変動する。市場価格が高騰するのは、お盆やお彼岸の時期で、100 本あたり 10,000 円程である。その為、価格が高騰する時期に合わせて花が咲くように生産する技術が求められるが、地球温暖化の影響で、花の咲く時期が以前に比べ早く、これまでの経験が通用しないことが多くあるようだ。

時期がずれてしまった場合、市場では 100 本あたり 2,000 円程で取引されている。しかし、JA を通して流通する場合、基準に満たない切り花は価格がつかないこともある。切り花の栽培には、多くの技術や労力が求められるにも関わらず、生産者が価格を決めることはできない点に問題を感じた。

(4) りんごの生産

小諸市では、りんごの生産が盛んである。特に、「信濃ゴールド」「信濃スウィート」「秋映」は、ブランド力をつけている。信濃ゴールドや信濃スウィートの出荷時期は 10 月～11 月、秋映は 11 月頃である。寒暖差により高い糖度を含むりんごとなる。りんごの栽培は、玉回しや摘花などの作業が必要で、暑い時期は虫がわくため、週に 1 度消毒を行わなければならない。市場価格は、品種によって異なるが 5kg で 2,000 円程度である。

6 次産業としては、りんごのジャムやりんごジュースが生産されている。りんごは市場価

格が低い為、6次産業への期待は高い。

(5) 切り花栽培の農業経営

今回、就農8年目のIさんと就農2年目のJさんKさんから農業経営について詳しいお話をうかがった。Iさんは、8年前に奥さんのご実家を継ぐ形で花の栽培を始めた。それまでは航空自衛官として全国各地でお仕事をなさっていた。栽培面積は、20アール程度でキクを栽培している。Jさん・Kさんご夫婦は、2015年に東京から夫:Jさんの故郷である長野県に戻り、2年間長野県農業大学校に通い農業の基礎知識と実践技術を習得した。前区長から空き家を紹介してもらったことにより、2018年の4月に小諸市大久保氷での花栽培をスタートした。

花を栽培することになったのは、お二人とも実家で花を飾っていたこと、育てていたことで家族の中にいつも花があったことがきっかけであった。Kさんは、「現代社会では、都市化や若い世代の花離れなど様々な理由から、花のある暮らしや、日本の行事が絶えていくことを考えると寂しく感じ、花が少しでも身近に、さりげなく飾れるような花を作りたい」と思っていた。

現在、ハウス3棟、面積22アール(ハウス11アール、露地11アール)で、主にトルコギキョウ・キクなどを栽培している。寒冷地では、花の栽培は夏から秋がメインであり、4・5月に苗を植え、キクは8・9・10月に、トルコギキョウは11月に出荷をする。花の栽培で重要なのは、その完成度で80%が決まるといわれている苗作りである。

また、花染みがあることで市場価格が下がってしまうことが多く、夏場は花が焼けないように循環扇を用い、冬場は暖房を焚き、ハウス内を適温に保つことが重要である。出荷先は、主に東京や大阪、神奈川、名古屋の市場や花卉会社でブライダルなどに使用されている。お二方とも“百姓は百姓なりの面白さ”があり、自分のペースでやりたいことを自由にできることが魅力的であるとおっしゃっていた。

(6) JA 佐久浅間

JA 佐久浅間は、正式名称を佐久浅間農業協同組合といい、小諸市・佐久市・佐久穂町・軽井沢町・御代田町・立科町・東御市の3市4町を行政地域とし、2000年に作られた農協である。複数の市や町が統合してできた農協で、統括している範囲が広くなりすぎたため、地域に根ざした活動が難しくなっている面がある。また、同じJA内であっても、地域によって力の入れ方や支援の手厚さが異なる。

(7) おわりに

今回訪問した大久保区、氷地区は千曲川の南斜面にあつて日照時間が短いため、北斜面とは異なった農業形態を採っている。氷地区では、主に伝統野菜である「白土馬鈴薯」やトマ

トの栽培を行っており、加えて菊やトルコキキョウなどの花卉栽培がさかんである。氷地区における激しい寒暖差が、切り花を色鮮やかに質の高い産品に繋がっている。ただ、高齢化の進行により、生産者の減少・後継者の不足・耕作放棄地の増加など様々な問題が生じている。また、今日の市場では多肉植物やドライフラワーへの需要が高まる一方で、切り花への需要が低下している。そして、市場価格が激しく変動する性質があり、時期を逃すと価値が無くなってしまうケースもあるようだ。

そうした中でも I さんや J さん K さんご夫妻のように、花卉栽培に参入する人たちもいる。田中さんの場合、就農前に 2 年間長野農業大学校に通い基礎知識と実践技術を取得するサポート体制があった。現在、切り花の質向上のために試行錯誤の繰り返しであり、新たな取り組みとしてドライフラワーや食用菊などの生産を行っている。

3. 農村女性の活動

(1) はじめに

今回、氷地区にお住まいの三名の女性から、農村における女性の役割や活動についてお話を伺った。インタビューに答えてくださったのは、L さん、M さん、N さんである。

3 人ともこの氷区に嫁入りの形で移ってこられた。L さんは小諸市出身で、かつて農協に勤め、農協婦人会によって作られたなずな会の元会長である。M さんは東京都出身であるが、M さんのお母さまが御代田町の出身で、かつてから長野県には親しみがあったそうだ。菊、コメの兼業農家である。現在は、息子さんご家族と同居しているが、三世代で暮らしている家庭は氷地区でも珍しいそうだ。N さんは小諸市の出身で、今年 3 月までお勤めされていたが、定年を機に退職された。息子さんご家族と同居しており、3 世帯で暮らしている。

L さんと M さんのお宅では、いわゆる「三ちゃん農業」で農業を営んでおられる。三ちゃん農業とは、壮年男性が勤めに出て、じいちゃん・ばあちゃん・かあちゃんが農業を行うことである。三ちゃん農業はこの地域のごく普通の農業経営であって、その意味で多くの女性が家事や育児だけでなく農業経営をも担っていた。インタビューでは、農村における婦人会などの女性のコミュニティ作り、家族関係、「女性の自立」についていろいろなお話しが聞けた。

(2) 農村における女性のコミュニティと組織活動

氷区における女性の組織には、農協婦人部と婦人会(老人会)の 2 つがある。現在、婦人会のある部落は減少しているが、氷区では今も婦人会が活発である。昔は一家に一人が婦人会に参加するのが一般的であった。

農協婦人部とは、氷区の農業協同組合における女性の組織で、現在 17 人の会員がいる。組合員ではない人も、結婚していれば入会することができる。会員は地域で行われるイベントにおやきや苺大福を作って「ははの味」として販売するなどし、その売り上げを収益としている。さらに、子を地域の外に出すのが心配な母親たちが、東京の五反田に「みすず寮」

をつくるなどの活動も行う。そのほかにも、農協婦人部には 100 円を持ち寄っておしゃべりをしたりお菓子を食べたりする「なずな会」というものがある。これは、人々が集まる場としてつくられ、自由に参加することができる。

氷区には婦人会という組織もあり、新年会や慰労会などを行なっている。補助金はなく、毎月会員から区費を徴収して活動費に充てている。初期消火の練習や災害時の炊き出しの練習など、婦人会を通して女性たちが主体的に様々な活動を行えるという。

男性は幼い頃からその地域で育ってきたため、消防団などのコミュニティを通した男性どうしのつながりが強い。その一方で女性は、嫁入りを機に知らない地域に突然入って生きていくことになる。このような背景が、女性どうしの地域におけるつながりを互いに必要とし、意識的にコミュニティを形成していったと考えられている。嫁入りで氷区にきた女性が、地域に馴染むための重要な役割を果たし、そのような組織の中で女性たちは地域のしきたりを勉強していくのである。

(3) 農村における家族関係

嫁姑関係

3 人の話を比較した際、やはり時代とともに嫁姑間の関係性も大きく変化していることが伺えた。幼いころ（60 年以上前か）の実母の思い出として語ってくれたお話の中に、「お伺いを立てる」というフレーズがあった。そのころ、母が家事を行う際にどんなことでも姑さんに許可をもらう必要があったそうだ。また明治時代の家父長制も根強く残り、お金の実権はその家のお父さんとお母さんが握っていたそうだ。しかし、現在では子育てもお姑さんが積極的に支援してくれる雰囲気があるという。氷区は昔から半日村や日陰村と呼ばれることから、わざわざ氷区に嫁ぎに来てくれたお嫁さんを大切にしようという流れも一方で存在し、家にいないときの子供の面倒や子供の教育に対してもとても熱心に支援してくれるそうだ。時代とともに関係性に変化が生まれていることが分かった。

外から来たお嫁さんに対して

農協婦人会や地区の婦人会は地域に馴染むことが出来る以上に、他の地域から来たお嫁さんにとって目に見えないしきたりを学ぶためにも重要な役割を果たしているということだ。また、市役所でのイベントやあゆみ会という直売所を運営する女性の会に参加することで縦のつながりだけでなく横のつながりもできるという。

(4) 氷区における女性の自立

氷区においては、その時代や周りの区と比べて女性が自立できていたとお話を通じて感じることができた。理由は大きく分けて 2 つある。

1 つ目は、氷区では女性が経済的に自立をしていたからである。戦後すぐに農協婦人会というものが作られ、その中で女性たちは商品（苺大福やおやきなど）を作り近くの温泉など

で販売し利益の中から収入を得ていた。その商品の 1 つを食べさせていただいたが、売り名の通り「ははの味」が感じられ、とてもおいしく温かみを感じられる商品であった。

かつて集落内にあった前田製糸場では、多くの女性が働いていてそこで女性は賃金を得て経済的なゆとりを生み出した。また、当時（50 年ほど前）では珍しい個人名義の通帳を女性が所持していたことも女性の経済的自立を生み出したものの 1 つである。区の人が 1 つ 1 つの家庭を回り強制的にお金を集め貯金させていたこともあった。当時は現金を保持していなかったため、「卵貯金」というものも行われていた。卵を渡すことによって現金とみなされそのまま通帳に貯金される仕組みであった。

2 つ目の理由は、女性がコミュニティを築いていたことで自立に繋がったとお話を聞いて感じたことである。50 年ほど前から女性は農業と家事を行っていたから、家に閉じこもりがちということはなく、女性は婦人会などの所属や嫁姑の繋がりを築くことで横の繋がりと縦の繋がりを作っていった。このように女性が中と外のコミュニティを作ることにより、家と家以外でのつながりができ、それが自立にむすびついた。

このように、経済的な自立やコミュニティを築くことによって氷区では女性の自立に繋がったのではないかと考えられる。経済的な自立により男女対等な関係を創りだし、コミュニティを築くことにより女性のはげぐちを造り自立に繋がった。このような女性の自立は、女性の雇用を生み出す環境や組織が作られていたことそして、元々の組織の中のコミュニティが生み出したものであり、氷区のような人数が少なく顔見知りであるような環境が女性の自立を生み出したともいえる。

IV. ゼミ指導教員の解題

学生と氷区の皆さんの懇談は 1 時間半ほどで、どのグループも話が盛り上がり、話題が尽きないまま時間切れになった。日本の農村や地域社会についてほとんど無知（せいぜい教科書で学んだ程度）な学生たちであるから、的外れ（それだけに意外性のある）質問も多かったであろうし、地域の方々は説明したことが理解できているのかと思われたこともあっただろう。にもかかわらず、辛抱強く、暖かく、学生の相手をしてくださった氷区の皆さんにまずは心から感謝をしたい。

私は時々グループの話を横で聞いたぐらいであって、話の進行には入らないようにしていた。学生が自分たちとは違う社会で違う言葉話す人たちとどう対話すればよいのか、とにかくやってみることが、合宿の目標の一つでもあったからである。その日の夕食後、学生達は集合し、各グループで聞いたことを発表し、お互いに質疑応答をした。私はそれを聞き、誤解や理解の不十分な点があれば、補足をしたにとどまる。Ⅲのレポートはその後、グループごとに学生が分担してまとめたものである（先述のようにできる限り原文のニュアンスを伝えるよう重富の編集は最小限にとどめた）。

今回、視察をし、お話しを伺った氷区は、小諸市川辺地区大字大久保にある集落である。

1954年2月1日に小諸町、北大井村、大里村、川辺村が合併するまで、行政的には川辺村に属していた。当時の川辺村は、大字大久保と大字山浦から構成されており、大字大久保の中に、自然集落として、大久保、氷、鵜久保（ときくぼ）、諏訪山、御牧ヶ原がある。このうち諏訪山と御牧ヶ原は開拓村であるから、古くからある集落は、大久保、氷、鵜久保であろう。表1に『2018年版統計小諸』のデータをもとに、2015年と2018年の人口と世帯数を集落別に示しておいた。これによると氷区の世帯数は2018年で38となっているが、区長からの聞き取りでは25戸ということであったから、実際に居住している世帯はもっと少ないということであろう。

表1 大字大久保の集落(区)別人口と世帯数

区名	人口(人)		世帯数(戸)	
	2015年	2018年	2015年	2018年
大久保	312	273	103	97
氷	102	96	39	38
鵜久保	256	271	84	105
御牧ヶ原	354	359	130	156
諏訪山	175	175	70	77
大字大久保計	1,199	1,174	426	473

出所:小諸市『2018年版小諸統計』

(file:///C:/Users/Owner/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/FNIOVLK0/toukei.pdf、2019年10月21日取得)

表2は同じく大字大久保内各集落の高齢化率（人口に占める65歳の割合）を示したものである。氷区が最も高く、しかもこの4年で高齢化が急速に進んでいることがわかる。

表2 大字大久保の各集落における高齢化率の推移

年	大久保	氷	鵜久保	御牧ヶ原	諏訪山
2014	35.58	36.96	30.94	32.94	44.06
2015	37.81	39.33	30.00	32.95	43.46
2016	39.62	40.45	31.62	34.02	47.37
2017	40.27	43.18	32.01	36.34	47.95
2018	41.88	48.28	32.47	37.97	46.38

出所:小諸市『2018年版統計小諸』

https://www.city.komoro.lg.jp/official/shisei_machizukuri/gyoseijoho/tokeichosa/6270.htm (2019年10月14日取得)

表3は、農業経営体数、経営耕地面積の2010年値を100としたときの2015年の値を区別に示したものである。氷区も減少はしているが、諏訪山区や御牧ヶ原区のような入植地を除くと、それほど激減しているわけではない。とくに水田の減少はわずかといえよう。

表3 2010年を100としたときの2015年の農業経営体数と経営耕地面積

	農業経営体 数（件）	販売農家 数（件）	経営耕地面積（a）			
			総面積	田	畑	樹園地
小 諸 市	84	83	94	94	94	90
旧 川 辺 村	96	95	102	100	103	112
大 久 保	83	82	86	88	85	10
氷	91	91	86	94	70	450
鴫 久 保	86	86	79	80	78	
諏 訪 山	80	80	109	70	108	201
御牧ヶ原	91	94	97	93	95	112

出所）小諸市『平成25年版統計小諸』『2018年版統計小諸』

（https://www.city.komoro.lg.jp/official/shisei_machizukuri/gyoseijoho/tokeichosa/3524.html、2019年12月30日取得）

表4は2015年時点の耕作放棄地の割合を地目別に見たものである。こうしてみると氷区は耕作放棄地の割合が少ないことがわかる。小さな集落で、高齢化も進んでいながら、残った人たちがしっかりと耕地を維持している姿がここから読み取れる。

表4 地目別耕作放棄地割合（%）

	総面積	田	畑	樹園地
大 久 保	45.5	18.7	83.1	6.4
氷	17.6	4.1	50.0	
鴫 久 保	19.6	9.1	36.3	
諏 訪 山	36.4	25.8	66.2	14.9
御牧ヶ原	8.7	2.5	13.4	2.7

出所：小諸市『2018年版統計小諸』

（https://www.city.komoro.lg.jp/official/shisei_machizukuri/gyoseijoho/tokeichosa/6270.html、2019年10月17日取得）

学生レポートのⅢ-1（村の成り立ちと地域おこし）にもあるように、氷区では毎年ムラの鎮守（諏訪神社）でお祭りがなされている。お祭りには神輿も神楽もなく、学生が理解したように人々が集落のアイデンティティを確認する場、機会としての役割が大きいのであろう。下の写真は諏訪神社で、境内がきれいに清掃されていることから、ムラのシンボルを守るという人々の気持ちが伝わってくる。逆に大字大久保という単位での祭りやシンボルはない。



(氷区諏訪神社、2019年11月9日、重富撮影)

氷区には共有林がある。この地域の共有林はかなり複雑な地形をしており、所有関係も入り組んでいるようだ。並んである風穴の一部は氷区の共有林、ひとは私有林、そして一つは氷区と大久保区の共有林に立地するそうだ。両区の共有林にある風穴は比較的状态がよいので、経済活動に向いているように思えるのだが、所有者が両区であるため収益の配分問題で合意ができないそうだ。

道路脇の草刈りは、現在も原則全員出役でおこなわれている。集会所の壁には区の役職が掲げてあり、区対抗のスポーツ大会の表彰状もある。集会所のすぐ脇には消防の火の見櫓と半鐘がある。集落はすぐそばの大久保集落とは森林などを挟んで距離があり、ひとつのまとまりをなしている。この氷区が江戸時代の藩政村であったかどうかは、史料をひもとかねばわからないが、人々が氷集落をひとつの自然村と理解して、共同体意識をもってきたことは間違いない。氷区は、資産、組織、そしてまとまり意識をもつひとつの団体とみることができる。

そこに外部から学生や建築士会の人たちが来て、風穴に注目した。地域の人々からすれば、それはずいぶん昔に使われなくなった、そして今となっては役立たずのものであった。ところが外部の眼からすれば、歴史的にも自然科学的にも極めて興味深いものである。地域の人々は風穴が観光資源となりうるものであることに気づいた。

そのとき、風穴をムラの資源として、村全体の活性化に使おうという発議がなされたことが重要である。そうした発議は、1人だけの力では出てこない。氷区の人々が共有していたまとまり意識や組織経験が、そうした発議を後押しする力となったはずである。そして幸い

にも風穴は（全部ではないにしても）氷区の共有地の中にある。これらの条件がひとつでも揃わなければ、氷風穴はそのまま森の中に埋もれていただろう。小さな集落ながら、まとまりがよく、しかもかつて養蚕業が盛んだったときには外部からの女工の寄宿舎や銭湯まで作ったという新しいもの、外部のものを受け入れる意識が、今回もプラスに作用した。これも学生の聞き取りで明らかになったことだが、氷区では女性が早くから自立しており、他所から来た「嫁」が地域の中でコミュニティを作れるような雰囲気、社会的なインフラがある。これも風穴を使った地域おこしに地域が前向きになった理由のひとつであろう。

風穴を観光資源化する上で不可欠なのは資金である。まず長らく使っていなかった風穴とその周辺を整備する必要がある。整備後はその維持管理に費用がかかる。氷区住民が中心になって作った風穴保存会は長野県地域発元気づくり支援金を受け取ったがこれは 2 割を自己調達することが条件である。その自己資金は一部、氷区の財政から借りている状態だという。しかし風穴がまだ収益を生むような状態になっていない以上、今後の資金調達が大きな壁となる。上記の補助金は 2019 年度が最後だそうで、来年度からは新しい資金源を獲得しなければならない。

この風穴はたまたま氷区にあり、氷区にコミュニティとしての特性があったから地域おこしの資源になった。しかし持続的な資源管理をするには、これを氷区だけのものとすることは無理がある。氷風穴を見に来る観光客は、布引観音や懐古園など小諸市の他の観光資源や軽井沢など周辺の観光資源の「ついでに」来る人が多いであろう。言い方を変えれば、小諸周辺の複数の観光資源がセットとなって観光客を呼ぶことができると考えた方がよい。だとすると、氷風穴を氷区が担うような仕組みではなく、より広い範囲で支える仕組みを作る必要があるのではないだろうか。風穴を利用する経済活動にしても、風穴の利用や管理にしても、30 戸ほどで高齢化が進む集落が、人的資源を自前で確保するのは無理である。

幸い氷集落には活発な婦人会もあり、地域おこしに前向きな雰囲気がある。そうしたコアがあることは、氷風穴プラスアルファの活動をつくる基盤となるだろう。その基盤が現実の組織活動につながるような行政のサポート体制作りが急務といえよう。

V. こんなことしてみたら？—学生の提言—

以下は学生の思いつきである。

- ・ 姉妹都市…農業体験などを通して使っていない農地を利用、風穴を知ってもらう。
- ・ 風穴博物館…「風穴はどうしてできたか」「なぜ涼しい、あるいは温かい風がでるのか」「小諸風穴の歴史」などを展示した博物館を集落内に作れば観光業になる。
- ・ 風穴カード…ダムカードや橋カードのようなもの。マニアが来るかも。
- ・ オーナーズボトル（貯蔵年別お預かりシステム）…日本酒やワインを 5 年～？年まで貯蔵しておくシステム。成人のお祝いに。
- ・ 食品のブランド化…風穴を使って何か食品を作り、それをブランド化する。例（風穴ビール etc）

- ・ 風穴が涼しいということを利用して、夏の暑い時期に風穴を利用してキャンプサイトをつくるのが良いのではないだろうか。
- ・ 婦人会「ははの味」で小諸市の特産品を活用した商品を全国展開で販売する。
- ・ 老人会や婦人会でスマホ教室などを開いてもらい、住民の方たち自身で運営する SNS アカウントを作り、様々な層の方に小諸の情報を発信する。
- ・ 食いだおれツアー…ご飯が美味しいところ魅力だと思ったので、それを活かせるツアーがあれば多くの人が訪れるのではないかな。今回の合宿のようにリンゴを齧るなど、自然を感じながらできたら面白いと思う。
- ・ 民泊…きれいな景色、おいしいご飯、そして優しい皆さんにとっても感動したため、村のツアーを行いながら、紅葉狩りやスキーを楽しめる体験つきの民泊を行ったらとても盛況すると思う。
- ・ フォトコンテスト…浅間山や氷区の斜面に広がる景色はとてもきれいなので、写真を撮ることで地区内外の人々に綺麗な景色を実感してもらう。
- ・ 小諸にアクセスしやすい都市の小学生を対象とした自然教室などの行事を行う。そこで、農業体験や民泊で田舎の暮らしを体験しようといった取り組み。
- ・ 東京から新幹線でアクセスしやすいのを知らない人が多いと思うため、意外と近いということを知らせるポスターをつくる。
- ・ 今は関西への販売を中心としている白土馬鈴薯を関東圏への販売も行う。
- ・ リンゴジュースやリンゴジェラート、アップルパイなどリンゴを活かしたカフェをつくる。
- ・ カフェは木造で。昔ながらの雰囲気、軽井沢のようなイメージで作ることによってインスタ映えを狙う。
- ・ 小学生や中学生の林間学習の場として提供し、より多くの人にまずは小諸市を知ってもらうきっかけにする。また、昔の話を知るお年寄りの方たちと子供たちの交流などを企画し、住民にとっても楽しい時間を作り出す。
- ・ 懐古園を利用し、年に一度大きなイベント（イルミネーション、みんなでお花見）を開催することで全国から観光客を集める。
- ・ 観光を活性化するために、インパクトのあるキャッチフレーズを一つ考えて駅や都内の鉄道内などのより多くの人目につく場所にポスターを張る。
- ・ 民泊や田舎にホームステイなど、実際に日本の暮らしを体験できるようなものを企画し、海外旅行客を呼び込む。
- ・ 高速バス会社と連携し、懐古園やリンゴ狩り、ワイン工場見学などのお得なツアーを企画する。

(以上)